

消化器癌術後経過観察中に発見された原発性肺癌症例の検討

市立甲府病院 呼吸器外科 宮澤正久

外科 小川玄洋, 塩澤秀樹, 望月靖弘,

巾 芳昭, 加藤邦隆

呼吸器科 菱山千祐, 大木善之助, 小澤克良

放射線科 斉藤彰俊

病理科 宮田和幸

要旨: 1999年4月から2004年4月において消化器癌術後経過観察中に発見され、手術が施行された原発性肺癌症例15例を対象とした。消化器癌としては胃癌が最多で9例、大腸癌5例、HCC1例であった。発見動機は胸部CT8例、胸部X線5例、自覚症状2例であり、肺癌組織型は腺癌10例、扁平上皮癌3例、大細胞癌および小細胞癌がそれぞれ1例であった。消化器癌手術と肺癌手術の間隔は最短6ヵ月、最長150ヵ月、平均52.9ヶ月であり、同時性(間隔1年以内)は3例であった。予後に関して死亡例は3例(肺癌死2例、消化器癌死1例)、他12例は消化器癌および肺癌とも無再発で生存中であった。

キーワード: 肺癌、消化器癌、重複癌

はじめに

人口高齢化や診断技術の進歩、癌検診の普及等により複数悪性腫瘍が発見される機会が増加している。同時性重複癌の他、癌治療成績の向上にともない第1癌治療後経過観察中に異時性重複癌が発見される場合も多くなっている。今回、消化器癌術後経過観察中に発見され、手術が施行された原発性肺癌症例につき検討した。

対象と方法

1999年4月から2004年4月における肺癌手術例190例中、重複癌症例は29例(15.3%)であり、男性111例中13例(11.7%)、女性79例中16例(20.3%)、同時性10例、異時性19例であった。うち、消化器癌と肺癌の重複癌は18例みられ、肺癌先行の2例および時期が一致している1例を除く15例を今回の対象症例とした。それらの症例につき、消化器癌の原発部位、

症例	年	性	消化器癌	発見動機	腫瘍径 (mm)	肺癌組織型	肺癌病期
1	58	M	HCC	X線	35	腺癌	IIIA
2	80	F	大腸癌・胆嚢癌	X線	30	腺癌	IA
3	63	F	大腸癌	X線	18	腺癌	IA
4	70	M	大腸癌	X線	50	大細胞癌	IIIA
5	74	F	胃癌	CT	25	腺癌	IA
6	65	M	胃癌	自覚症状	50	扁平上皮癌	IIB
7	63	M	胃癌	CT	25	腺癌	IB
8	70	F	胃癌	CT	22	腺癌	IA
9	74	M	胃癌	CT	10	小細胞癌	IIA
10	81	F	胃癌	X線	15	腺癌	IA
11	74	F	大腸癌	CT	20	腺癌	IA
12	65	M	大腸癌	CT	10	腺癌	IA
13	68	M	胃癌	CT	10	扁平上皮癌	IA
14	57	M	胃癌	CT	15	腺癌	IA
15	78	M	胃癌	自覚症状	15	扁平上皮癌	IA

表1 消化器癌術後に発見された肺癌症例

肺癌の発見動機、腫瘍径、組織型、病期、消化器癌手術から肺癌手術までの期間、肺癌手術後の予後につき検討を加えた。

結果

15症例は男性9例、女性6例、年齢57歳から81歳であった。詳細を表1に示した。先行消化器癌は胃癌が9例と最多であり次いで大腸癌が5例であった。その他HCCが1例で、症例2は消化器癌として大腸癌と胆嚢癌が重複しており、その他甲状腺癌の既往もあり肺癌とあわせ4重複癌症例であった。発見動機は胸部CTが8例、胸部X線5例、自覚症状2例とCT発見例が多かった。肺癌組織型は腺癌10例、扁平上皮

癌3例、大細胞癌と小細胞癌がそれぞれ1例で、病理病期はIA期10例、IB期1例、IIA期1例、IIB期1例、IIIA期2例であった。病理学的腫瘍径は10～50mmであり、CT発見例に限ると10～25mm（平均17.1mm）であった。消化器癌手術と肺癌手術の間隔（図1）は最短6ヶ月、最長150ヶ月、平均52.9ヶ月であり、間隔が1年以下の症例が3例あった。肺癌術後の予後に関しては死亡例が3例あり、術後44ヶ月および18ヶ月に肺癌死した2例と術後18ヶ月に大腸癌死と考えられた1例であった。他12例は観察期間が短い症例が多いものの消化器癌および肺癌に関していずれも無再発生存中である。症例を1例提示する。

68歳男性で1999年7月胃癌にて手術を施行、2003年7月胸部CT(図2A)で左S¹⁺²の結節性病変を認めた。6ヶ月後のCT(図2B)では結節の増大を認め、術前確定診断は得られなかったものの原発性肺癌あるいは転移性肺腫瘍の疑いにて手術を施行した。術後病理所見は中分化扁平上皮癌で原発性肺癌(pT1N0M0、stage IA)の診断となった。

考察

当科における年間消化器癌手術数は胃癌40~50例、大腸癌70例程度、その他20例程度であり、大腸癌が最多である。大腸他臓器重複癌に関する報告¹⁾では、異時性で大腸癌先行の場合第2癌は肺癌が最多であるとされ、今回の検討では対象症例15例中、先行消化器癌は胃癌に次いで大腸癌が多かった。斉藤ら²⁾も他臓器重複肺癌に関し、重複癌臓器として胃癌が最多で次いで大腸癌であったと報告している。当院外科においては、大腸癌術後follow upの際に、最近では胸部X線のみではなく胸部CTをも施行する傾向にある。これはCT検診の普及等によりX線無所見の肺癌が発見される機会が増え、大腸癌術後肺転移の早期発見に関してもCTの有用性が認識されるようになってきたことと関連していると考えている。症例11は、大腸癌術後5ヶ月目の胸部CTにてX線無所見の20mmの肺腺癌が発

見された症例である。大腸癌術前に、肺転移あるいは早期原発性肺癌の発見目的で胸部CTがルーチン化されてもよいと考えられる。その症例を含め15例中8例がCTで発見されていることを強調したい。

重複癌の定義³⁾に関して、特に問題となるのは“一方が他方の転移ではない”という点である。対象症例は先行癌が消化器癌であり、肺癌の組織型が腺癌であった場合に転移か原発かの鑑別が必要である。細気管支肺胞上皮癌の場合には原発性肺癌の診断は組織所見のみから困難ではないと考えられるが、肺腺癌が低分化の場合には、病理学的所見および消化器癌との間隔年数等の臨床経過を考慮し、消化器癌の転移、再発の可能性が低ければ原発性肺癌とした⁴⁾。

異時性、同時性に関し、Moertel⁵⁾は診断時期が6ヵ月以内である場合を同時性としそれ以上の間隔がある場合は異時性としているが、同時性の間隔を1年以内としている報告⁴⁾もみられ、今回の検討でも間隔が1年以内の3例は同時性と判断された。これらは先述の症例11を含めいずれも消化器癌術後の最初のfollow up CTの際に発見された症例であった。

予後に関し、斉藤ら²⁾は他臓器癌先行の異時性肺癌手術例の5年生存率を50%と報告している。今回の検討では肺癌術後観察期間が短い症例が多く生存率については論じられないが、15例中2例は肺癌死してい

ることには着目すべきであると考えられる。
 症例1は胸部X線のみで定期的に follow されて
 いた IIIA 期症例であり、症例7は当初炎症性病
 変が疑われ経過観察となったが2年の経過で
 CT 上陰影の変化が認められた IB 期症例⁶⁾
 である。第1癌治療後経過観察中には常に第
 2癌の発生を考慮し、このような症例をなくす
 努力が必要と思われた。

おわりに

消化器癌術後経過観察中に発見された肺
 癌手術症例につきまとめた。

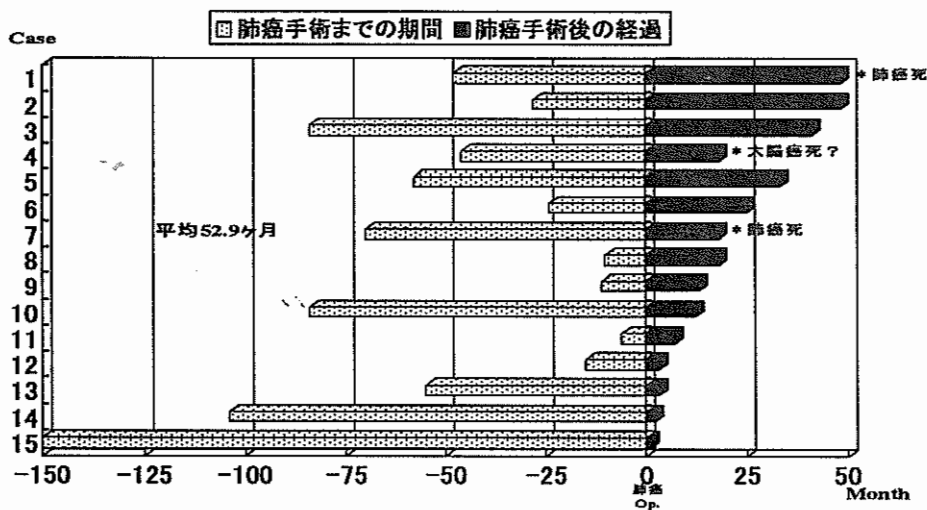


図1 重複癌の間隔と肺癌術後の経過

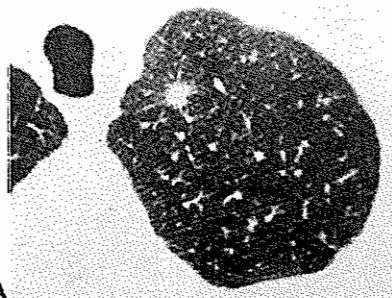


図 2A



図 2B

参考文献

- 1) 島谷英彦、藤井久男、小山文一・他：
大腸他臓器重複癌症例の検討。日本大腸肛門病学会雑誌 56 (6) : 294-298, 2003
- 2) 斉藤 裕、裴 英洙、伊藤祥隆・他：
他臓器重複癌を有する肺癌切除症例の検討。胸部外科 55 (3) : 187-192, 2002
- 3) Warren S, Gates O : Multiple primary malignant tumors. A survey of literature and a stastical study. Am J Cancer 16:1358-1414, 1932
- 4) 金光真治、高尾仁二、藤永一弥・他：
原発性肺癌切除例における他臓器重複癌症例の臨床的検討。肺癌 43 (4) : 301-306, 2003
- 5) Moertel CG : Multiple primary malignant neoplasms : historical perspectives. Cancer 40 : 1786-1792, 1977
- 6) 山口 弘、大木善之助、小澤克良・他：
CT 画像上で興味ある発育過程を観察し得た肺腺癌の一例。山梨肺癌研究会会誌 16 (1) : 11-14, 2003